アーサー・シモンズと『ラヴェングロー』

南 條 竹 則

I

人と人の廻り合いに劣らず、人と本の廻り合いも又運命の（偶然の？）手に委ねられている。ことに幼い者にとって、本はこちらが選ぶというよりも向こうからやって来るものだ。そして幼い日に読んだ本ほど、人の心の有様を生涯に亙って規定するものはない。

文学研究に携わる者が、或る人間が書物から受けた影響を云々する時、この点に留意しないと足元を掬われる危険が大きい。とりわけ気をつけるべき事は、我々は、世に名作・傑作と謳われるものほど人の心に及ぼす力が大きいと、無条件にそう考えがちであるが、それは必ずしもそうではないという事である。幼い日にはすべてが驚異である。幼い日の感動に、世間がつくったヒエラルキーが口を差し挟む余地はない。そして長じてのち、かつて自分を魅了した書物が色褪せていることを知っても、我々の心のある一隅は依然古い友に忠実であり続けるものだ。

上の一般原則は無論アーサー・シモンズにも当て嵌まる。シモンズといえば、わが国のみならず欧米においても、フランス象徴詩の英国への紹介者、或いは雑誌『サヴォイ』の主幹をつとめた世紀末頽廃派の旗頭、という印象が強い。そのためかシモンズと他の作家との影響関係を論ずる研究家も、ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ等のフランス詩人、又は〝頽廃派〟の先達ゴーチェやペイター、又はシモンズが詩法上多くを学んだエリザベス朝の詩人等を専ら問題にしていて、『ラヴェングロー』の作者がシモンズに与えた筈である深大な影響については、論じられることが少ない。しかしながら『ラヴェングロー』がシモンズの少年時代を魅了した書物であり、従って軽々には扱うべからざる書物である事は、事実上シモンズの幼い頃の回想記と言ってよい散文[1] "人生の序曲 A Prelude to Life" の一節を見れば明らかである。

> The reading of 'Lavengro' did many things for me. It absorbed me from the first page, with a curiously personal appeal, as of some one akin to me, and when I came to the place where Lavengro learns Welsh in a fortnight, I laid down the book with a feeling of fierce emulation. I had often thought of learning Italian: I immediately bought an Italian Bible, and a grammar; I worked all day long, not taking up 'Lavengro' again, until, at the end of the fortnight which I had given myself, I could read Italian. Then I finished 'Lavengro.'[2]

ここで「私」（≒シモンズ）が、イタリア語を覚えるためにイタリア語の聖書と文法書を買ったのには特別な意味がある。『ラヴェングロー』の主人公（≒作者ジョージ・ボロー）は聖書と文法書、時には聖書だけを頼りに外国語を習得するという特技を有していた。（ラヴェングローとはジプシー語で〝言葉を操る者〟といった意味である。）「私」はそれに対抗心を燃やし、同じ事を試みたという訳である。「私」は更にこう語る。

> 'Lavengro' took my thoughts into the open air, and gave me my first conscious disire to wander. I learned a little Romany, and was always on the lookout for gipsies. ...[3]

シモンズに放浪癖があり、始終旅していた事は、かれの伝記を繙くまでもなく、『Cities』『Cities in Italy』『Cities and Sea Coasts and Islands』『Wanderings』といった数々の紀行文集の存在が物語っている。"The Wanderers"（『Amoris Victima』所収）、"Gypsy Love"（『Silhouettes』所収）等の詩は放浪への憧れを

歌う。また、Lhombreaud[4] によればシモンズはほぼ一生に亘って the Gypsy-lore Society に入っていたというし、かれのエッセイにも出てくる 'super-tramp' フランク・ウィラード[5]は親しい友人だった。この点だけを取ってもシモンズとボローは同類であったと言えるが、これだけではない。実際、'some one akin to me' というのも成程と項突ける程『ラヴェングロー』に書かれた考え方やものの感じ方には、シモンズを思わせるところが多々ある。『ラヴェングロー』第23章で主人公がドイツ文学を良く言わないところや、第31章で少年が橋からテムズ川を眺めながら、恐怖と死の誘惑とを感ずるところなどは、その小さな例であるが、筆者はこの事を強調するために、比較の対象として特に注目すべき一例をここに紹介しようと思う。

II

先に引用した〝人生の序曲〟は短篇集『Spiritual Adventures』(1905)に収められているが、同じ本の中に〝シーウォード・ラックランド Seaward Lackland〟という短篇がある。まずはその粗筋を語ろう。

主人公シーウォードはコーンウォルの漁師の子である。かれは或る嵐の夜に生まれ、父親はその時丁度漁船で沖に出ていた。母親は、もし夫が無事帰って来たらこの子を神様に捧げます、と誓った。少年は宗教的教育を受けて大きくなり、やがて 'a local preacher' となり、時々教会で説教をするようになる。しかしかれはずっと信仰の問題で悩み続ける。或る夜かれの夢に人間の姿をした悪霊が現われ、断崖の上でこう語りかける――「シーウォード・ラックランドは地獄に堕ちるのを知っているか？……彼奴は聖霊に対する罪を犯したから地獄に堕ちるんだ」夢から醒めたシーウォードは考える。

> He knew that he had been dreaming, but the dream might have been a message. He knew the text in the Bible, and he had often wondered what it meant. Had not Jesus said: 'All manner of sin and blasphemy shall be forgiven unto men: but the blasphemy against the Holy Ghost shall not be forgiven unto men'? It was the most terrible saying in the Bible. What was the sin which even God could not forgive? He remembered that reiteration in Matthew: 'And whosoever speaketh a word against the Son of Man, it shall be forgiven him: but whosoever speaketh against the Holy Ghost, it shall not be forgiven him, neither in this world, nor in the world to come.' Might it not be possible for a man to sin that sin in ignorance? Would his ignorance avail him, if he had actually sinned it? These thoughts troubled him strangely, and he tried to put them away from him.[6]

自分は過去にその罪を犯したかも知れないという思いは、一種の脅迫観念となり、しまいにかれは次のように考え始める。――たとえ聖霊に対する罪は犯していないとしても、他の諸々の罪と汚れに染まっている自分を神が赦し給うたなら、神の正義は損なわれる。恩寵を垂れる事は神が自らを低くする事になる。キリスト者たる自分は己の救済よりも神の完全さを願うべきではないのか？　してみると、神が正しくあるために、自分は救われてはならない。――こう結論したシーウォードは進んで永劫の地獄に堕ちるために、〝聖霊に対する罪〟を犯す。すなわち、キリストの御業はすべて悪魔の力によるものだと説教壇から説くのである。

問題はこの〝聖霊に対する罪〟というテーマである。上の物語と、『ラヴェングロー』に登場するメソジストの説教師ピーター・ウィリアムズのエピソードとを較べていただきたい。それは次のようなエピソードである。

ジプシーに毒を盛られて死にかけていた『ラヴェングロー』の主人公（簡便のため以下単にラヴェングローと呼ぶ事にする）は、ウェールズ人の説教師夫婦に発見され助けられる。少年とこの夫婦はそれから数日間同じ森蔭に寝起きするが、ある時少年は、真夜中に人の呻き声で目醒める。呻き声はあの夫婦が寝ている馬車から聞こえて来る。やがて説教師の、苦悶に充ちた怖ろしい叫び声が響き渡った――"Pechod Ysprydd Glan—O pechod Ysprydd Glan!" ウェールズ語を解する少年には、その言葉が〝聖霊に対する罪〟の意味だとすぐにわかった。少年は翌晩ピーターに「あなた自身の話を聞かせてくれ」と言うと、説教師は両手で顔を覆い、ボロボロと涙を流し始めるが、「心が落ち着いたら話そう」と約束する。そして二日後の晩、少年に己が秘密を打ち明ける。その内容は第75章と第76章に書かれているが、要約すると次のようなものである。

ピーターは北ウェールズの農家に生まれた。父親は信心深い国教会の信徒で、或る秋の日の午後、当時七歳になるピーターのいる前で近所の人と宗教上の話題を話し合っていた。父親は言った。「天国に行くのは至難の業

だ」すると相手は、「全くです。しかし私は絶望してはいない。聖霊に対する罪を犯した者を除けば、誰も天国へ行く希望(のぞみ)を捨てる事はありませんよ」「ああ！　私はその罪を犯していなくてよかった――聖霊に対する罪を犯した人間の心中はどんなに怖ろしいものだろう。その事を考えると髪の毛が逆立つよ」……この話をそばで聞いていた少年は、その晩寝つかれず、父親が言った事を考える。

> I kept wondering to myself what must be the state of a person who had committed the sin against the Holy Ghost, and how he must feel. Once or twice I felt a strong inclination to commit it—a strange kind of fear, however, prevented me; at last I determined not to commit it, and having said my prayers, I fell asleep. (7)

この夜以来かれは〝その罪〟を犯してみたいという欲望と、その実行を妨げる奇妙な恐怖とに取り憑かれる。閑さえあればその事ばかり考えるようになる。そしてある夜、かれはついに意を決する。

> Awaking in the night, I determined that nothing should prevent my committing the sin. Arising from my bed, I went out upon the wooden gallery, and having stood for a few moments looking at the stars, with which the heavens were thickly strewn, I laid myself down, and supporting my face with my hand, I murmured out words of horror—words not to be repeated—and in this manner I committed the sin against the Holy Ghost. (8)

このあとの少年の心理は極めて微妙なものであるから要約する事は難しいが、ともかくかれの心の移り変わりの要点を述べると、初めのうちかれは、他の誰も敢えて犯し得ないような罪を自分は犯したのだ、と半ば得意な気持ちになっている。だが、やがて怖ろしい返礼がやって来る。かれの父親が病に倒れ、子供達にこう言い残すのだ。「わしは去(ゆ)くが、くよくよするな、きっとわしらはみんな天国でまた会える」この瞬間、少年は取り返しのつかぬ事をしてしまったと悟り、恐怖に襲われる。自分だけは他の兄弟達と違って、天国に行けないのだ!!――それ以来地獄の恐怖がかれに重くのしかかる。

しかし一度はこの恐怖も去ったかに見えた。ある朝野原で涼やかな気分が久し振りに訪れ、かれは再び神に祈る事が出来るようになる。これをきっかけに教会にも通い始めて、かれは心の平安を取り戻す。ある時、日曜日の説教で、聖書をよく読むようにと言われたので、かれは家に帰ると亡き父親の聖書をでたらめにめくってみる。めくって開いた個所を見ると、そこにはこの一文があった――'He who committeth the sin against the Holy Ghost shall not be forgiven, either in this world or the next.' (9)

かれは再び地獄に突き落とされる。……以上が、真夜中の呻き声の理由である。

シモンズは、『Figures of Several Centuries』に収められたエッセイ "The Genius of Thomas Hardy" の中で、良い詩は何度も繰り返し読む事が出来るのに対し、小説の場合は再読に耐えるものが少ないという事を述べている。そのくだりで、かれはこう言っている。

> Balzac is always good to re-read, but not Tolstoi: and I couple two of the giants. To take lesser artists, I would say that we can re-read *Lavengro* but not *Romola*.....(10)

又、『Studies in Prose and Verse』中の一篇 "Robert Louis Stevenson" には、こうある。（引用文中 'he' とあるのはスティーヴンスンのこと）

> Quite by himself in a certain seductiveness of manner, he ranks, really, with Borrow and Thoreau, with the men of secondary order in literature, who appeal to us with more instinctive fascination than the very greatest.....(11)

これらの個所からも察せられるのは、シモンズがボローに〝魅力ある小作家〟としての名誉ある地位を与えていた事――幼い日の〝黄金の書〟が色褪せてうち捨てられていた訳ではないという事であり、『ラヴェングロー』は再読三読しているような口振りでもある。〝シーウォード・ラックランド〟を書くにあたり、かれがピーターの物語を意識していた可能性は非常に高いと言えよう。

二つの物語に共通しているのは、主人公が〝聖霊に対する罪〟に恐怖を覚えながらも、その罪を犯さないではいられなくなる、背反した心理の交錯であり、逆に違いを言えば、ピーターは結局地獄の恐怖に戦くばかりであるのに対し、シーウォードの屈折した完全主義・マゾヒスティックとも言えるかれの神への愛は、かれを一種の

殉教者たらしめている点であろう。ボローから借りたテーマを用いて、シモンズは何を表現しようとしたか。——両者の類似点と相違とを考える事は、シモンズ特有の美学を明らかにする格好の材料となろう。

Ⅲ

『ラヴェングロー』とシモンズとの関係についてはもう大凡おわかりいただけたと思うので、これから本題に入る事にする。ボローとシモンズを比較研究する上で問題とすべき点は数多あろうが、本稿の目的は、シモンズが作品中に言及している〝ボローの恐怖〟なるものについていくつかの事柄を整理する事にある。

シモンズ晩年の紀行文を集めた『Wanderings』(1931)の中の"Aspects of Cornwall"というエッセイ集に、次のような一節がある。

> Infinity itself, I conceive, might lose some of its horror—indeed, some of "the Horrors" of Borrow—when, beside the sea, the world itself seems no more to have a limit.....[12]

同じエッセイ集の別の個所には、こうある。

> At Lamorna, the most desolate place I have ever seen in Cornwall, as I gazed down from the cliff into the stormy waves that heaved in a tumultuous passion against the grim rocks, there came over me that curious sensation (certainly known to Borrow) of the terror of the abyss, *épris de l'horreur de l'abîme.*[13]

上の二個所に言及された「無限 Infinity」の恐怖、および「奇妙な感覚 curious sensation」が一体いかなる性質のものであるのか、又その二つは同一の感覚を差しているのか否か、といった問題は、これらのエッセイおよびシモンズの他のいくつかのエッセイを検討することによって或る程度明らかになる。しかし今は専らボローとの関係から考察してゆこう。いずれの感覚も一種の恐怖感である事は文脈から明らかであり、そしていずれの場合においてもシモンズは、自分の感じた恐怖が、ボローが感じた恐怖乃至ボローの作中に描かれている恐怖と同様のものである事を、'some of "the Horrors" of Borrow' 'certainly known to Borrow' の句によって仄めかしている。それでは〝ボローの恐怖〟とはいかなるものであろうか？　そしてボローは何を〝知っていた〟というのであろうか？　もし、ここでシモンズが言及するものの性格がわかれば、逆にそれによって、シモンズ自身が感じた恐怖なるものの性格を類推する事が可能であろう。

前の引用部分でシモンズは"the Horrors"と書いている。大文字のHは、それが或る特定の恐怖である事を示している。伝記を繙けば大抵書かれている事だが、一種の神経症的傾向のあったボローは幼い頃から、名状し難い恐怖感にたびたび襲われたという事実がある。かれは聖書協会の依頼で満州語訳聖書を作るため、ペテルブルグに渡った事があるが、その頃故郷の母に宛てて書いた手紙に次のような一節がある。

> The 'Horrors,' for example. Whenever they come I must drink strong Port wine, and then they are stopped instantly.[14]

ボローは宿痾のように自分を悩まし続ける恐怖を Horrors と呼んでいた。それに倣ってボローの伝記作家などもこの語を用いる事が慣用になっており、上に引用したシモンズの文章もそれを踏まえている事は疑いない。

シモンズがボローの作品や書簡・伝記的資料等をどの程度読み、Horrorsについてどれだけ多くを知っていたか、今正確に推知する事は難しい。しかしかれが『ラヴェングロー』をよく読んでいたのは確かであるから、少なくともこの作品に描かれている〝恐怖〟は、〝ボローの恐怖〟という時、かれの念頭にあったものと考えて良かろう。シモンズは『Studies in Prose and Verse』中の一篇"The Russian Soul"の中で、『ラヴェングロー』の或る個所に触れている。

> Take, in "Lavengro," the chapter describing his paroxysm of fear in the dingle,..... I know nothing of the kind, in any language, equal to those pages of Borrow; they go deep down into some "obscure night of the soul".....[15]

ここにある 'the chapter' とは明らかに第84章の事である。旅の鋳掛け屋から小馬と商売道具一式とを譲り受けた主人公は、第83章でジプシーの友 Mr. Petulengro に言う——自分は一人孤独になって静思に耽りたい、そして鋳掛け屋をやりたい——。するとジプシーは、かれの望みに適った寂しい場所を教えてくれる。その場所が上の引用文にある 'the dingle' である。

It was a deep hollow in the midst of a wide field, the shelving sides were overgrown with trees and bushes, a belt of sallows surrounded it on the top, a steep winding path led down into the depths, practicable, however, for a light cart, like mine; at the bottom was an open space, and there I pitched my tent, and there I contrived to put up my forge. "I will here ply the trade of kaulomescro," said I. (16)

ラヴェングローはここに腰を落ち着けて、ズブの素人ながら苦心惨憺の末馬の蹄鉄をつくりあげ、それを自分の小馬のひづめに付けてやる。この大仕事のあと、重苦しい気分が、次いで凄まじい恐怖がかれを襲う。それがシモンズの言う 'paroxysm of fear' である。この部分はシモンズを語る上でもボローを語る上でも頗る重要であるから、少々長めに引用させていただく。

..... And now, once more, I rested my head upon my hand, but almost instantly lifted it again in a kind of fear, and began looking at the objects before me, the forge, the tools, the branches of the trees, endeavouring to follow their rows, till they were lost in the darkness of the dingle; and now I found my right hand grasping convulsively the three forefingers of the left, first collectively, and then successively, wringing them till the joints cracked; then I became quiet, but not for long.

Suddenly I started up, and could scarcely repress the shriek which was rising to my lips. Was it possible ? Yes, all too certain; the evil one was upon me; the inscrutable horror which I had felt in my boyhood had once more taken possession of me. I had thought that it had forsaken me; that it would never visit me again; that I had outgrown it; that I might almost bid defiance to it; and I had even begun to think of it without horror, as we are in the habit of doing of horrors of which we conceive we run no danger; and, lo ! when least thought of, it had seized me again. Every moment I felt it gathering force, and making me more wholly its own. What should I do ? — resist, of course; and I did resist. I grasped, I tore, and strove to fling it from me; but of what avail were my efforts? I could only have got rid of it by getting rid of myself: it was part of myself, or rather it was all myself. I rushed amongst the trees, and struck at them with my bare fists, and dashed my head against them, but I felt no pain. How could I feel pain with that horror upon me ! and then I flung myself on the ground, gnawed the earth and swallowed it; and then I looked round; it was almost total darkness in the dingle, and the darkness added to my horror. I could no longer stay there; up I rose from the ground, and attempted to escape; at the bottom of the winding path which led up the acclivity I fell over something which was lying on the ground; the something moved, and gave a kind of whine. It was my little horse, which had made that place its lair; my little horse, my only companion and friend in that now awful solitude. I reached the mouth of the dingle; the sun was just sinking in the far west, behind me; the fields were flooded with his last gleams. How beautiful everything looked in the last gleams of the sun! I felt relieved for a moment; I was no longer in the horrid dingle; in another minute the sun was gone, and a big cloud occupied the place where he had been; in a little time it was almost as dark as it had previously been in the open part of the dingle. My horror increased; what was I to do?—it was of no use fighting against the horror, that I saw; the more I fought against it, the stronger it became. What should I do: say my prayers? Ah! why not? So I knelt down under the hedge, and said, "Our Father"; but that was of no use; and now I could no longer repress cries; the horror was too great to be borne. What should I do: run to the nearest town or village, and request the assistance of my fellow-men? No! that I was ashamed to do; notwithstanding the horror was upon me, I was ashamed to do that. I knew they would consider me a maniac, if I went screaming amongst them; and I did not wish to be considered a maniac. Moreover, I knew

that I was not a maniac, for I possessed all my reasoning powers, only the horror was upon me—the screaming horror! But how were indifferent people to distinguish between madness and this screaming horror? So I thought and reasoned; and at last I determined not to go amongst my fellow-men whatever the result might be. I went to the mouth of the dingle, and there placing myself on my knees, I again said the Lord's Prayer; but it was of no use; praying seemed to have no effect over the horror; the unutterable fear appeared rather to increase than diminish; and I again uttered wild cries, so loud that I was apprehensive they would be heard by some chance passenger on the neighbouring road; I, therefore, went deeper into the dingle; I sat down with my back against a thorn bush; the thorns entered my flesh, and when I felt them I pressed harder against the bush; I thought the pain of the flesh might in some degree counteract the mental agony; presently I felt them no longer; the power of the mental horror was so great that it was impossible, with that upon me, to feel any pain from the thorns. I continued in this posture a long time, undergoing what I cannot describe, and would not attempt if I were able. Several times I was on the point of starting up and rushing anywhere; but I restrained myself, for I knew I could not escape from myself, so why should I not remain in the dingle? so I thought and said to myself, for my reasoning powers were still uninjured. At last it appeared to me that the horror was not so strong, not quite so strong upon me. Was it possible that it was relaxing its grasp, releasing its prey? O what a mercy! but it could not be—and yet I looked up to heaven, and clasped my hands, and and said, "Our Father". I said no more, I was too agitated; and now I was almost sure that the horror had done its worst.

After a little time I arose, and staggered down yet farther into the dingle. I again found my little horse on the same spot as before; I put my hand to his mouth, he licked my hand. I flung myself down by him and put my arms round his neck; the creature whinned, and appeared to sympathise with me; what a comfort to have any one, even a dumb brute, to sympathise with me at such a moment! I clung to my little horse as if for safety and protection. I laid my head on his neck, and felt almost calm; presently the fear returned, but not so wild as before; it subsided, came again, again subsided; then drowsiness came over me, and at last I fell asleep, my head supported on the neck of the little horse. I awoke; it was dark, dark night—not a star was to be seen—but I felt no fear, the horror had left me.(17)

翌日かれは手持ち無沙汰に、説教師ピーターがくれたウェールズ語の聖書を読み始める。偶然サウルのことを書いたくだりに行き当たると、サウルも自分と同じ体験をしたに違いないと思われて深い共感をおぼえる。ボローはその個所が聖書のどこなのか明記してはいないが、サムエル前書第16章の後半である事は明らかである。(18)

この第84章に描かれている恐怖が 'Horrors' の一例である事に間違いはないが、引用個所から窺われるその特徴を二三指摘してみると —— 1) それは間をおいて何度も（すなわち〝間歇的に〟）訪れる。2) それは外界の何物かに対する恐怖ではない。自己の外に理由（恐怖の対象）のない、いわれなき恐怖である。3) それは忍び足で犠牲者に近寄り、その気配を感じた時既に人はそれの手中にいる。恐怖感は次第に強まり、或る極点を越えると波が引くようにおさまってゆく。—— といった事になろう。これらの特徴は、実はシモンズの作品に書かれているいくつかの恐怖感情と共通している。筆者が本稿で Horrors の問題を取り上げたのはそれ故であり、いずれ比較検討を行うつもりである。しかし今は、シモンズが〝ボローの恐怖〟と同様のものを自身感じたと語っている事、そしてかれの念頭にあった〝ボローの恐怖〟の一例と覚しきものが、上に見る通りの内容である事を確認するにとどめておく。

IV

ところで、『ラヴェングロー』に描かれた〝恐怖〟の例として忘れてはならない個所がもう一つある。それは、15歳になった少年の進路について両親が頭を悩ましていた頃のエピソードである。少年は正体不明の病気に罹り

急速に衰弱する。医者にみせても効はなく、結局一人の老婆が 'a bitter root' から作った薬で治してくれるのだが、この病に罹っていた時少年は奇妙な恐怖に襲われる。前出の引用文に 'the inscrutable horror which I had felt in my boyhood' とあるのは、これを差していると思われる。

> Oh, how dare I mention the dark feeling of mysterious dread which comes over the mind, and which the lamp of reason, though burning bright the while, is unable to dispel! (19)

第18章の末尾にある母と子の対話は勿論ラヴェングロー母子の対話であるが、この個所には少年が感じたものの性質がよく表わされている。

> "What ails you, my child?" said a mother to her son, as he lay on a couch under the influence of the dreadful one; "what ails you? you seem afraid!"
>
> *Boy.* And so I am; a dreadful fear is upon me.
>
> *Mother.* But of what; there is no one can harm you; of what are you apprehensive?
>
> *Boy.* Of nothing that I can express; I know not what I am afraid of, but afraid I am.
>
> *Mother.* Perhaps you see sights and visions; I knew a lady once who was continually thinking that she saw an armed man threaten her, but it was only an imagination, a phantom of the brain.
>
> *Boy.* No armed man threatens me; and 'tis not a thing like that would cause me any fear. Did an armed man threaten me, I would get up and fight him; weak as I am, I would wish for nothing better, for then, perhaps, I should lose this fear; mine is a dread of I know not what, and there the horror lies.
>
> *Mother.* Your forehead is cool, and your speech collected. Do you know where you are?
>
> *Boy.* I know where I am, and I see things just as they are; you are beside me, and upon the table there is a book which was written by a Florentine; all this I see, and that there is no ground for being afraid. I am, moreover, quite cool, and feel no pain—but, but—— (20)

先に引き合いに出した 'dingle' での恐怖と同様、この恐怖も何ら原因を持たない。正確には、自己の外に原因がないと言うべきであろう。少年の五感は何も異常なものを捉えてはいない。思考能力も乱れてはいない。ただ恐怖感があるだけである。一体かれは何が怖いのか？この問題を考える上で興味深い事が一つある。ラヴェングローは 'Horrors' の他にもう一つのものに憑かれていた。それは一言でいうなら、世界の実在性に対する懐疑であった。

話が形而上学めいてくるが、ラヴェングローはまさしく哲学少年だったのだから仕方がない。第30章で、かれは職探しにロンドンへ行く。ノリッジで師事したドイツ語の師からの紹介状を手に、ある出版屋 publisher を訪ねる。出版屋は最初の会見の時、少年が書いた哲学のエッセイを讃める。

> Sir, I admire your style of writing, and your manner of thinking; and I am much obliged to my good friend and correspondent for sending me some of your productions.....——quite original, sir, quite; took with the public, especially the essay about the non-existence of anything..... (21)

少年が相当形而上学に関心を持っていた事はこのくだりからも推察出来る。それも不思議はない。ラヴェングロー≒ジョージ・ボローがドイツ語を習った人物は、ノリッジのウィリアム・テイラー William Taylor (1765-1836) だった。ドイツの文芸に傾倒し、ヴィーラント、レッシング、ゲーテ等の作品を英訳紹介して功績のあったこの人物の風貌は、『ラヴェングロー』第23章に生き生きと描かれている。旧弊・狭見な既成宗教と道徳を冷やかに見下すシニック、ドイツ贔屓の異教徒贔屓で、ド・クィンシー、ペイター等哲学的審美家の系譜に置かれるべき美学者——ボローがかれのもとでドイツ語の他にドイツ哲学、それも当時隆盛であった所謂観念論哲学の手ほどきを受けた事は想像に難くない。

少年はくだんの出版屋に雇われ、しばらく〝犬の生活〟を送る事になる。かれに与えられた仕事の一つは、この出版屋自らが書いた哲学書——世界は「オックスフォードの馬鹿共が言うような林檎の形ではなくて、梨の形をしている」という自説を開陳したもの——をドイツ語に訳す事だった。この出版屋は又新しい評論雑誌を創刊するところだったので、少年は書評もやらされる。のちにカントの英訳を書評する事にもなる。

An English translation of Kant's philosophy made its appearance on my table the day before its publication. In my notice of this work, I said that the English shortly hoped to give the Germans a *quid pro quo.* (22)

'quid pro quo' というのは、そのうち自分が凄い哲学書を書いてやるぞ、という含みであろうから、随分哲学に入れ込んでいる訳である。しかしかれにとって哲学・形而上学は単なる知的ゲームではなかった。かれの心は偉大な先人の思索の成果を本当に必要としていたのである。ノリッジにいた頃から、かれは一つの疑問を抱えていた。それは 'what is truth?' という事だった。これだけでは随分漠然としているが、第25章を読むとこの問いの意味するところはおよそわかってくる。少年は言う。

.....I was, indeed, in a labyrinth! In what did I not doubt? With respect to crime and virtue I was in doubt; I doubted that the one was blameable and the other praiseworthy. Are not all things subjected to the law of necessity? Assuredly; time and chance govern all things: yet how can this be? alas!

Then there was myself; for what was I born? Are not all things born to be forgotten? That's incomprehensible: yet is it not so? Those butterflies fall and are forgotten. In what is man better than a butterfly? All then is born to be forgotten. Ah! that was a pang indeed; 'tis at such a moment that a man wishes to die. (23)

かれは絶対の真理、存在の窮極の根拠を求めているのである。しかしそんなものは容易に姿を現わさない。万象の儚さと虚しさ、うつろいやすさに思いを致すうちに、かれの考えはやがて、眼前の宇宙はすべて幻妄ではないかという懐疑に変わってくる。

"Would I had never been born!" I said to myself; and a thought would occasionally intrude. But was I ever born? Is not all that I see a lie—a deceitful phantom? Is there a world, and earth, and sky? Berkeley's doctrine—Spinosa's doctrine! Dear reader, I had at that time never read either Berkeley or Spinosa. I have still never read them; who are they, men of yesterday? "All is a lie—all a deceitful phantom," are old cries; they come naturally from the mouths of those, who, casting aside that choicest shield against madness, simplicity, would fain be wise as God, and can only know that they are naked. This doubting in the "universal all" is almost coeval with the human race: wisdom, so called, was early sought after. All is a lie—a deceitful phantom—was said when the world was yet young; ..... All is a lie, was the doctrine of Buddh; and Buddh lived thirty centuries before the wise king of Jerusalem, who sat in his arbours, beside his sunny fishpools, saying many fine things, and, amongst others, "There is nothing new under the sun!" (24)

世界は実在するのかという疑い——それは突きつめれば結局、五感に捉えられている世界が、五感を通じて認識する事の可能な範囲の外、すなわち経験の外にその存在根拠を持つか否かという問いになろう。だから、物自体←→表象というカントの二分法を借りて、これを〝表象世界の実在性に対する疑い〟と言い換えて良いと思うが、この疑いそれ自体が蔵している不条理は、先に引き合いに出した病める少年の恐怖と全く共通してはいないだろうか？　病気の少年は目の前に母がおり、自分はベッドに寝て安全に守られている事を知っている。かれを取り巻く世界にはかれを脅やかすものは何もない。それなのに恐怖はやって来る。それはかれの内から来るのか？或いは世界の外から来るのか？

世界の実在性に対する疑いもこれと同様である。かれは世界をまやかしではないかと疑っている。しかしかれの眼前に展けている表象世界の中には、その秩序の破綻を兆すものはどこにもない。仮に世界がすべてまやかしであったとしよう。まやかしがまやかしだとわかるのは、その秩序＝仕掛けにどこか破綻があるから正体がバレるのであって、仕掛けが完璧ならば何の疑いも生じないし、疑う必要もない筈である。完璧なまやかしはまやかしではない。表象世界は完璧なまやかしである——'時と偶然がすべてを律している time and chance govern all things.' 何故かれは問いを発しなければならないのか？

この不条理に少年が気づいていたかどうかはわからないが、とにかくかれはこの問題を忘れ去る事が出来ない。

第36章にはこうある。

> My own peculiar ideas with respect to everything being a lying dream began also to revive. Sometimes at midnight, after having toiled for hours at my occupations, I would fling myself back on my chair, look about the poor apartment, dimly lighted by an unsnuffed candle, or upon the heaps of books and papers before me, and exclaim: "Do I exist? Do these things, which I think I see about me, exist, or do they not? Is not everything a dream—a deceitful dream? Is not this apartment a dream—the furniture a dream? The publisher a dream—his philosophy a dream? Am I not myself a dream—dreaming about translating a dream?[25]

世界は夢——この懐疑はほとんどかれの固定観念となっていて、かれがロンドン橋で知り合う老婆との遣取りにも顔を出す。老婆というのは、林檎売りの傍ら盗品を売買し、デフォーの『モル・フランダース』を大事に抱えていつも読んでいる、『ラヴェングロー』の odd figures の一人であるが、少年は彼女に向かって世界は夢だという自説を持ち出すので、相手は狐につままれた心地になる。老婆は『モル・フランダース』を泥棒礼讃の本とばかり思い込んでいて、以て自分の生業を正当化していたのだが、ようやく良心が芽生えて来ると、こんな本はもう要らないと言い出す。そこで少年がその本を聖書と交換してきてやる、と言うと、

> "Well, dear," said the old woman, "do as you please; I should like to see the—what do you call it? —Bible, and to read it, as you seem to think it true."[26]

少年は 'seem' という言葉を拾って言う。

> "Yes," said I, "seem; that is the way to express yourself in this maze of doubt—I seem to think—these apples and pears seem to be—....."[27]

ラヴェングローの巫山戯半分の言葉が実はかれの問いの核心を突いている事は興味深い。まさしく世界は「そう見える」——主観にそう認識される——限りにおいて存在し、それ以外の形式では存在し得ない。すなわち〝世界は私の表象である〟のだから。世界に表象以上の物を求めてはならない。我々の認識に〝私〟という枠が嵌まっている事をどうこうしようとしても詮はない。……理性はこう教える筈だが、しかし少年の疑いは去らない。かれの〝恐怖〟がどうしても去らないように。

次にあげるのは、ロンドンを後にしたかれがストーン・ヘンジの前で羊飼いと交わす対話である。

> "I wonder whether there is a world."
> "What do you mean?"
> "An earth and sea, moon and stars, sheep and men."
> "Do you doubt it?"
> "Sometimes."[28]

'the Horrors' ——外界に原因のない不条理な恐怖。そして外界の実在性に対する不条理な疑い。この二つをラヴェングローが持っていた事。そしてかれが観念論哲学への興味と知識を有していた事。——この二つの事柄は、『ラヴェングロー』を愛読したシモンズ自身その作品において観念論的主題を多用し、しかも一種の恐怖に取り憑かれていた事を考え合わせると、看過し得ぬ重大な意味合いを帯びてくる。特に問題となるのは、〝恐怖〟と〝疑い〟との間に何らかの関係があるのか否かという事だろう。この点に関し有益な示唆を与えてくれるのは、やはり一つの恐怖に憑かれていたジョン・アディントン・シモンズのケースであるが、この、もう一人のシモンズについては稿をあらためて論ずる事にしよう。

(1985. 10. 28.)

註

(1) シモンズは晩年『*Memoirs*』と題する回想記の出版を企てた。この企画は結局実現されなかったが、シモンズが〝人生の序曲〟をこの回想記に入れるつもりであったことは、かれの literary agent である Ralph Pinker への手紙に書かれている。這般の事情については、Karl Beckson ed. *The Memoirs of Arthur Symons* University Park: The Pennsylvania State University Press, 1977. に付せられた編者の序論を参照されたい。

(2) *Spiritual Adventures* New York: E. P. Dutton, 1905. p. 32.

(3) Ibid.

(4) See Roger Lhombreaud *Arthur Symons: A Critical Biography* London: The Unicorn Press, 1963. p.17, 277.

(5) Frank Willard (1869-1907) アメリカ生まれの作家にして放浪者。自らtrampとなってアメリカやヨーロッパを廻り、"旅の者"達と交わった。筆名はJosiah Flynt。『*Wanderings*』中の一篇"Berlin's Discomforts"は、シモンズがウィラード夫妻に招かれてベルリンへ行った時の回想である。シモンズが序文を寄せたウィラードの自伝『*My Life*』(1908) にもこの時の思い出が書かれている。

(6) *Spiritual Adventures.* pp.218-9.

(7) George Borrow *Lavengro* London : John Murray, 1900. p.407.

(8) Ibid. p.408.

(9) Ibid. p.412.

(10) *Figures of Several Centuries.* p.211.

(11) *Studies in Prose and Verse.* p.81.

(12) *Wanderings* London: J.M.Dent, 1931. p.262.

(13) Ibid. p.260.

(14) 引用はハーバート・ジェンキンズの伝記による。Herbert Jenkins *The Life of George Borrow* London: John Murray, 1912. p.125.

(15) *Studies in Prose and Verse,* p.171.

(16) *Lavengro,* p.443.

(17) Ibid. pp.449-51.

(18) 「かくてエホバの霊(みたま)サウルをはなれエホバより来る悪鬼これを悩せり　サウルの臣僕(しもべ)これにいひけるは視(み)よ神より来れる悪鬼汝をなやます　ねがはくはわれらの主汝のまへにつかふる臣僕に命じて善く琴を鼓(ひ)く者一人を求めしめよ神よりきたれる悪鬼汝に臨む時彼手をもて琴を鼓て汝いゆることをえん……サウル人をエサイにつかはしていひけるはねがはくはダビデをしてわが前に事(つか)へしめよ彼はわが心にかなへりと　神より出たる悪鬼サウルに臨めるときダビデ琴を執り手をもてこれを弾(ひく)にサウル慰さみて愈え悪鬼かれをはなる」(文語訳『旧新約聖書』、日本聖書協会。省略及びルビ・漢字の変改は筆者)

(19) *Lavengro,* p.110.

(20) Ibid. pp.111-2.

(21) Ibid. p.186.

(22) Ibid. p.216.

(23) Ibid. p.159.

(24) Ibid. pp.160-1.

(25) Ibid. pp.217-8.

(26) Ibid. p.259.

(27) Ibid.

(28) Ibid. p.320.